

丸山美由紀

東京テレポートセンター・アトリウム/1999年3月3日

何階まであるのだろうか、高い吹き抜けのだだっ広いホールの中。横のカフェテリアでは、ランチを食べている人がいる。そして、そばを通行人が行き交う。そのうちの何人が、ピアノが鳴っていることに気がついていたのだろうか、「ハンマークラヴィア」が演奏されていることを意識していたのだろうか、そして、第何楽章のどこか……。

演奏家の後側の席で聴いた。(ピアノの回りを、観客用のイスが二重に取り囲んでいる。その場所を選んだのは、演奏家が聴こえる音に近ければ、同じ気持ちになれるかなと思ったに過ぎない。)耳を澄ますと、ピアノの音が鳴っており、そのまわりに、終始ザワザワとしたざわめきが聴こえる。それに関係なく演奏家と作曲家の音楽の対話が進行していた。不思議な雰囲気だったが、言いようのない素晴らしい時間だった。

どうして、今の時点で「ハンマークラヴィア」なのか。特別視しちゃいけないのだろうが、やっぱり特別ナンダ。どんな演奏になるか興味があったが、心配だった。冒険し過ぎではナイカ。收拾がつかなくなるのではナイカ。その不安はリハーサルを聴いて解消した。(早目に会場に着いたら、リハーサルしていた。会場の性格上、締め出しじゃなく、誰でも聴ける状態であった。)心配していた第3楽章の出足は、若々しく女性らしいものであり、ヒステリック、インインメツメツ、息もタエダエでもなかった。気を街うことなく気負いがない素直な音だったので、安心した。

本番の第3楽章では、演奏家が音を一つ一つ確かめる様にたどっていく音楽に引き込まれて、一緒についていったに過ぎない。一つ一つの音は意識できたが、どの様に音楽を構成していたか判らない。カーツとして、冷静さを失っていた。演奏家が、ベートーヴェンさんが楽譜に書いた悩みを忠実に拾い上げそれを丹念に表現している。そして、演奏家の気持ちで少し色付けしている。必要以上に悲劇的なものでない。優しく柔らかな感覚で見つめている。無理な背伸びも感じられず、素直である。私には、不安、うつろい、ためらいが描かれている様に思われた。演奏家や作曲家の意図は別であったのかも知れない。私も、一緒に、不安、ためらいをズッと感じ続けた。そして、悩みから解放される安らぎの箇所に到達した時、本当にホッとした。美しくキレイで暖かく心安らかな所である気がした。

このアプローチは一回ですまない。この楽章を演奏するたびに同様な作業を繰り返す。大変なことと思う。でも、作曲家と楽譜を通して対話し、ピアノで表現できるということは羨ましいことである。私には、演奏家の感覚を通してしか判らないから、自分をその分ミジメに思う。スゴイ感覚で分析された演奏に出会った時、どうしようもない音楽性にかなわないナアと思う。今日の様な演奏については、演奏家に、人間性にも上質なものを感じ、メンタル的に最高の状態を過ごさせてもらい嬉しい気がするが、打ちのめされた気もしてしまう。この演奏家が現在持っているものを十分に出しておき、今しか聴けない「ハンマークラヴィア」と思う。今度聴く時は、また違った気持ちにさせられるのかも知れない。聴いてみたいと思う。

第4楽章は、今まで何故あるのか考えたこともなかった。一つの音楽だと思っていた。でも、今日の演奏を聴きながら、もう一つのベートーヴェンさんの理想郷の様に思えた。ワイワイガヤガヤだが、この音が好きだ。耳が聞こえないが、自分の理想とする音楽の世界はこんなんだ。こんな世界が欲しいんだ。演奏家は、それを一生懸命に表現しようとした。大変な作業であり、思いどおりにならない部分もあったと思う。次にこの曲を聴く時は、ベートーヴェンさんが理想としたものを整理して、もう少しハッキリと教えてもらいたいと思った。

ベートーヴェン：ピアノソナタ 第29番 ハ短調 Op.106「ハンマークラヴィーア」
